

登山とチーム

柳 沢 昭 夫

登山は冒険的要素を内包したスポーツ

登山は、高峻な山岳を舞台に、風、雨、雪、寒冷、低酸素等、異状とも言うべき環境下で、背負い上げるわずかな装備や食糧で衣食住をまかない、数日間に渡って、1日数千カロリーを消費する長時間行動を伴う、スケールの大きなスポーツである。荒天に翻ろうされ、体力の限界に近い激しい登山やつらいビバークは、全く、他のスポーツには見られない厳しさを伴っている。

大自然には、人の力では推し計ることのできない、困難や危険が内在している。しかし、そうした中で、より困難なルートをクライミングしようとするのが登山である。言わば、登山は、その本質的要素に、さけて通ることのできない、冒険的要素を内包したスポーツである。危険を内包することなしに成立することができないスポーツである。危険と困難とは、厳密に区別しなければならない。

しかし、危険は、登山の全過程を予測できないところに存在するので、困難な課題を求め続ける過程が登山であるかぎり、予測できない要素は、その大きさを増大するとも言えよう。もっとも、事故は、予測できない要因よりも、ある部分の予測不足や予測の誤りによることが多い。それは、人間である故に止むを得ないことかも知れない。こうした不確定な要素を含め、未知な要素を課題にするのが登山の特色と言える。

防禦力はチーム構成の基盤

登山、ことにクライミング中は、ある意味では危険地帯の中にいるのであるから、危険地帯はできるだけ速く通過するほうが望ましい。時間がかかるほど、荒天に襲われたり、落石や雪崩に遭遇する確率が高くなる。確かに、スピードは安全に継がり、クライミングにおける正確な技術はスピードを速める。しかし、払うべき注意、必要なプロテクション、使うべきザイル等、安全確保をおろそかにしては、いくらスピードがあっても、無事であるのは僥倖に恵まれたからにすぎない。ザイルを操る技術は、高度な攻撃的技術ではない。ザイルは、本来身を守るためのものである。山には、困難ではなくても危険な所は多い。ちょっとした残雪、崩れやすい山道、小川の増水、滑りやすいガケや岩場の通過、ザイルの使用を省略したための事故事例はあまりにも多い。少しでも危惧するところは積極的にザイルを使い、安全確保につとめたい。安全が確保されて、大胆な行動、次への大きなステップにつながる。防禦力を構成する技術的側面がザイルの技術である。

一方登山は、他のスポーツと異なり、生活と行動を切り離して考えることができない。厳しい環境下での激しい行動、長時間に及ぶ緊張、十分とは言えない休養とエネルギー補給、寒く、湿気の多い暮営生活、それが数日から十数日に渡って続くのであるから、生活技術、露営技術、健康管理等、最

もベーシックな部分が、攻撃的な登攀を支える防禦の基礎になる。ことに、スケールの大きな登山ほど機能的に目的を追求せざるを得ないところがあるので、こうしたベーシックな部分が重要になる。というのは生活や健康管理が崩壊しかかるとは、機能的な攻撃を組立する事が不可能になるからである。

冬季登攀は、クライミングそのものが困難であるとともに、岩壁に付いた氷や雪の状態、降雪、寒気、風等気象条件によって著じるしく登攀状況が変わる。条件が悪くなれば、ときとして、夜間にまで及ぶ長時間の非常に困難なクライミングになる。クライミングでは、一定の重量を越えては、登攀が不可能になるので、必要な登攀用具（これが一番重量をしめるが）除いて、限られた重量の範囲内に装備食糧等を納めなければならない。その結果、ビバーク装備、食糧がぎりぎりまで削られ、数日間に及ぶ継続登攀となると、1日1000calほどのエネルギー補給でクライミングする者も多い。その上、岩壁のビバークは、狭い場所で、寒気にさらされ、十分な休息や睡眠をとることができない。

冬期継続登攀などに見られる非常に厳しいビバークを重ねる山行は、登攀能力はもとより、長時間に及ぶ行動力、か酷な自然の悪条件に耐える力、そうした条件に対応するための判断力、精神力等を養わない、荒天やアクシデントの発生など、最悪な状況に落ち入っても、それをきりぬけるための大きな経験となる。同じ様にか酷な自然条件にさらされる冬期の縦走も、大きな防禦力を養うことができるが、露営生活、ルートの読みなどぎりぎりのところでの判断などは、クライミングほどシビアではない。

近年、荒天、降雪等で、救助を依頼するチームが続出するのを見聞するに及び、困難な条件下でのクライミングやビバーク経験を含め、防禦力を構成する努力が不足しているのではないと思われる。

ことに、海外の高峰登山をめざす者は、冬期の継続登攀を実践して、こうした力、特に、耐える力をつける必要があると思う。

チームの構成と経験

経験は、単に知識や情報の集積に終わらず、感性の部分を含めて、判断力、価値観、行動力等を創造する総合的な資料である。その意味で、登山は、経験によって、未知の要素を推測し、対処するスポーツである。登山は、経験を積み上げて、新しい経験を作りだすスポーツである。しかし、個人の経験には限界があり、飛躍的な経験の集積を得ることはできない。一方、チームとしての経験は、経験がチームの中でディスカッションされ、整理されると、個々の経験の加算にとどまらず、積算されて経験の質的変換と蓄積を図ることができる。チームの歴史や伝統と言われるものは、チームの長い時間的過程の経験が、再構成され、新しい経験として作用する力になったものである。それは、知識として力になったり、トレーニングや訓練、山行形態等、組織の形をとって機能する。殊に、人に蓄積された経験は、組織の中で十分機能すれば、大きな力になる。

経験の知識的な部分は、知識として整理され、追体験することも可能である。しかし、経験の感覚的要素は、その多くが人の感性にしか蓄積されない。先輩や指導者の経験が、ダイナミックな感覚的

経験として機能するには、そうした人達の意欲的な登山活動が条件である。と言うのは、登山から遠ざかってしまえば、そうした人達が持っている貴重な経験、ことに、感覚的な経験は、色あせ、錆びてしまう。もちろん組織として有機的に結びついていなければ、チームに還元されないことは言うまでもない。

チームの経験、先輩や指導者の経験が、正しく継承され、力を発揮するには、経験という貴重な情報が、思考過程を経て、あるいはディスカッションによって整理され、理論や技術としてあるいは感性として残されなければならない。記録やまとめ、紀行文などが持つ意味である。

記録や紀行、ヒマラヤの高峰や大岩壁の登攀記のみならず、どのように小さな山行でも、会報や部報、書籍などから、他人の体験を追体験することは、ただ単に、情報を得る、知識を得る以上に、経験を深め、判断力を高め、豊かな感性を養うことができる。

知識や理論は、経験から思考過程を経て抽出されたものであるが、抽出されなかった部分にも、創造性を養う感性に働きかけるものが多い。そうしたものは、登山に関する書物にとどまらず、他のジャンルの書物や映像、ときには、一枚の絵や一編の詩でさえ創造性を豊かにしてくれる。

ことに、若い時は、みずみずしい感性にあふれた時代である。知識だけでなく、経験の持つ感覚的要素を取り入れて欲しい。それは、やがてスケールの大きい感性にあふれた登山に終結する。

プロジェクトチームの問題点

日本人は、チームを考えるとき、真面目であるが故に、非常にしっかりとした組織、いうなればタイトなチームでなければ気のすまない傾向がある。それが決して悪いと言うわけではない。しかし、性格を課題に対する行動様式の多様性とするならば、もっとルーズな性格のチームがあってもいいのではないだろうか。登山におけるチームは、課題を合理的に解決するプロジェクトチームであるとともに、未知の可能性を求め続ける力を養うところである。スポーツは、本来感性の世界である。わけでも登山は、知識や理論だけで課題を解決できない体験など感性の力をかりなければならないスポーツである。プロジェクトをなしとげるというより、未知の可能性をさぐることがチームの目的である。チームとしてトレーニングを創造し、経験を再構成し、登山の全過程を創造することによって可能性を求め続けることができるのではないだろうか。目的を達成するという合理性だけを追求すれば、全てのチームが同じ方法論、組織論を展開することになり、多様性が失われ、しいては創造性を否定することになる。

今情報化社会の中で、情報が氾濫しているように見えても、その情報は、目的的な、非常に貧しい知的、合理的な情報が氾濫している。登山も、海外登山をはじめとして、目的を完遂するための合理的情報を収集してプロジェクトチームが構成されるようになった。

ことに大きな登山隊になるほど、プロジェクトチーム的な性格を持つようになり、ブレン組織を設けたり、あるいはスタッフとラインと言うような形でチームが構成されるようになる。ブレンや

スタッフは実践におけるリーダーとは違う。ブレンからメンバーへの一方通行組織であってはならず、チーム全員が、登山の全過程の創造に参加していなければ、登山に多様性と新しい展望を持つことはできない。ブレンを設けた場合には、実践から情報がブレンにフィードバックされなければならない。もちろん、フィードバックされる情報は知的情報のみではない。経験的、感性的情報が含まれなければならない。しかしブレン自身が実践をともしなわれないかぎり、感性センサーは十分機能しないし、チームメイトが全ての情報を共有できないようでは、ブレンも又、全ての情報を得ることはできない。最近の大遠征隊には、実践と遊離したブレンとフィードバックシステムの欠落したチーム構成のなんと多いことか。ルート、行動、装備、トランスポート等を計算し、問題を合理的に追求して解決し、それ以外の要素を切って捨てるタイトなチーム構成は、なんと味けないことだろうか。プロジェクトチームを全て否定するのではない、それがもっとルーズで、経験や感性を蓄積し、再構成して、可能性をさぐる次へつながるチームでありたいと考える。一見、タイトで合理的なチームであるから結果を出すことができたように思われるが、可能性を求め続けるのが登山である。合理的でない部分を切って捨ててしまえば、その時だけしか結果をだせない、非常に貧しい登山になってしまうのではないだろうか。

これからのチームは

今世界の登山は、カンチェンジュンガの完全縦走をなしとげるチームが出現したり、あの怪峰ジャヌーの北壁を新ルートから数十時間で単独登攀を成しとげ、メスナーにして21世紀の課題といわしめたローツェ南壁でさえ、無酸素、単独で登攀したトモ・チェセンのような者が出現した時代である。登山も、歴史的社会的過程にある。突然、トモ・チェセンが出現したのではない。今、世界のレベルはそこまで達しているのである。日本からも数多く海外遠征隊は出かけてゆくが、高峰における登山の内容は、国内における冬期登攀の衰退とともに著しくたち遅れている。こうした世界のレベルを超えてゆくのは、若い人である。単に、継承的、肯定的登山を展開するのではなく、他のジャンルのスポーツが上げている素晴らしい科学的成果を取り入れ、創造的に既成の登山を否定し、新しい登山を展開しようではないか。

可能性は、それぞれの人に存在する。しかし、その可能性が現実化するのには、チームメイトや大勢の人々とのさまざまな係わり合いの中である。ひとりの山も素晴らしい。しかし、ひとりでは自分の世界さえ超えられない。人との係わりがあってこそ、さまざまな限界を超えることができる。ここで、世界の先を見つめて、チームの在り方と、登山組織の在り方について考えてみよう。

(登山研修所専門職員)